

7. 大学院における研究科・専攻ごとの分析と課題

(大学院生による授業評価アンケート結果に対する全体的解釈等)

(1) 人間文化研究科 応用英語専攻

1) 研究科・専攻の科目を全体的に見た現状の説明

Due to the very small size of our sample (and our student body), the results of the questionnaire are not very meaningful. However, overall our results are slightly worse this year in several areas as well as being slightly worse in comparison with the entire graduate school average. More specifically, for three questions, our results have improved, while they have worsened for the remaining seven. For two questions, we are better than average, while for eight, we are slightly, generally .1 or .2, worse.

2) 長所と改善点

Our students read the syllabus and understand our grading more than average. The general levels of contentment and interest in the classes, however, are slightly below average. Again, due to the smallness of the sample, it is difficult to judge the importance of the results.

3) 改善の方策

On the basis of the questionnaire, it is difficult to make any specific proposals. However, it seems likely that an increased personalization of our very small classes will involve the students more and increase both their satisfaction and their intellectual development.

4) 今後の課題

As was the case last year, the most important problem is the smallness of our enrollments, and we must continue to make the program more attractive to prospective students.

文責：Robert Kritzer (人間文化研究科 応用英語専攻 教授)

(2) 人間文化研究科 人間文化専攻

1) 研究科・専攻の科目を全体的に見た現状の説明

本年も、授業評価アンケートの方法そのものについての議論に始まり、そのことの改善策の検討で研修会の大学院割り当て時間は終始した。われわれ自身、専攻の科目の集計を全体的に見て、その現状について議論することは大いに望むところであり、授業評価アンケートの大学院における実施自体は意義のあることとするが、以下の理由から、方法において問題を含んでいると考えられる。また、その結果は完全に信頼はできないのではないかと。理由1. 記入者が容易に特定できることから、客観的な回

明確な基準を設けて評価することが難しいのが現状である。そのため改善の方策については、今後も検討していくことになる。「シラバスの活用度」については、年度初めのオリエンテーションでも、その重要性を学生に伝えている。また、授業内でも、その日の講義内容が、シラバスに記述された授業の流れの中で、どのように位置づけられているかを確認するなど、それぞれの教員が工夫している。それにもかかわらず、シラバスの活用度は毎年低い。その理由を探る試みとして、授業評価のアンケート項目の中に、シラバスのことを、学生がどのように認識しているかを問う項目を設けて、学生が何故、シラバスを活用しようとししないのかを分析してみるのも、一つの方策ではないかと思われる。

4) 今後の課題

課題としては、3) で記述したように、学生の全体的な研究能力をどのようにして伸ばしていくかについて検討していくことが挙げられる。「成績評価の明確性」についても、可能な限り、学生に提示することができるような明確な基準を設けていくことが課題となる。「シラバスの活用度」については、学生のシラバスに対する意識を調査してみる必要があるのではないかと思われる。

文責：河瀬 雅紀（心理学研究科長）